

法政大学国際日本学研究中心・国際日本学研究所  
文部科学省 学術フロンティア推進事業  
異文化研究としての〈日本学〉

# The Newsletter

# HOSEI I.J.S.

No.8 Apr.2008.



2007年10月22日  
中国社会科学院  
日本研究所（北京）にて



2007年11月22日～24日  
「翻訳の不可能性をめぐって」国際シンポジウム  
アルザス欧州日本学研究所 [CEEJA]  
（フランス・キーンツハイム）にて

## C O N T E N T S

|                     |    |
|---------------------|----|
| 国際シンポジウム報告          | 2  |
| 公開講演会・公開ワークショップ報告   | 5  |
| 東アジア（日中）文化研究会報告     | 7  |
| 外国人客員研究員報告会         | 13 |
| 異文化研究としての「日本学」研究会報告 |    |
| 合同研究会報告             | 14 |
| 新刊案内                | 16 |

## 国際日本学シンポジウム

### 「翻訳の不可能性をめぐって」

- 日 時：2007年11月22日（木）～24日（土）
- 場 所：アルザス欧州日本学研究所[CEEJA]（フランス・キーンツハイム）
- 共 催：法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究所、フランス国立科学研究学院 [UMR8155]、ストラースプール・マルクブロック大学、ボン大学近現代日本研究センター、アルザス欧州日本学研究所

ヨーロッパのほぼ中央に位置し、文化的に仏独のいずれとも深いかかわりをもつ、フランス・アルザス地方（コルマール近郊のキーンツハイム）にある、アルザス欧州日本学研究所において、法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究所ほか4つの大学・研究機関が共同で、11月22日から24日の3日間、国際シンポジウム「翻訳の不可能性をめぐって」を開催した。そこでは、法政大学8名（星野勉、相良匡俊、安孫子信、田中優子、王敏、小口雅史、山中玲子、ステイーヴン・ネルソン）、フランス国立科学研究学院2名（Josef KYBURZ、Hartmut ROTERMUND）、ストラースプール大学2名（Christiane SEGUY、Sandra SCHAAL）、ボン大学1名（Hans-Dieter OELSCHLEGER）、フランクフルト大学1名（Christian STEINECK）、デュッセルドルフ大学1名（Shingo SHIMADA）、ベルリン自由大学1名（Irmela HIJIYA KIRSCHNEREIT）の計16名からなる日本学研究者が研究発表を行なった。また、参加者の専門分野は、哲学、宗教学、文学、歴史学、文化人類学、社会学などと多岐にわたり、文字通り国際的かつ学際的なシンポジウムであった。

これは、また、国際シンポジウム「日本学とは何か —ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究—」（2005年12月1日～3日、パリ日本文化会館）から、国際研究集会「国際日本学 —ことばとことばを越えるもの—」（2006年11月18～19日、法政大学）に至る一連の事業展開を受け継ぐものである。

ところで、2005年パリ国際シンポジウム開催のうちに、会場であるパリ日本文化会館では日本の「妖怪展」が開かれていた。日本の古い妖怪画から最近の水木しげるの妖怪画まで展示されていたが、フランス人にもなかなか好評であったと聞いている。そのさい、「妖怪」をフランス語にどう訳すかということがたいへん問題となつたらしい。しかし、結論は、フランス語には翻訳しがたいということであろうか、「妖怪」は「YOKAI」となった。もとより、「fantome」、「spectre」というようなフランス語をそれに当てることはできる。しかし、それはそれでフランス文化の文脈でのみもちうる独特の意味を示すものであるから、かえって「妖怪」が日本文化の文脈でもっていた意味を見えなくしてしまいかねない。イタリアの哲学者クローチェも言っているように、「どんな〈翻訳〉も裏切りのようなものである」。おそらく、優れた翻訳とは、優れた語学力に裏打ちされたものであることは言うまでもないが、同時にまた、翻訳不可能性に対する感覚に裏付けられたものでなくてはならない。

国際シンポジウム「翻訳不可能性をめぐって」は、この「翻訳不可能なもの」に迫ることによって、1) そもそも翻訳とは何か、よい翻訳とはどのような翻訳であるか、翻訳

において何が起きているのかを改めて問い、そこから、2) 異文化理解や異文化交流のあり方を照らし返して、そして、3) 日本学、日本研究をより開かれた場面に位置づけ直すことを課題とするものであった。コーディネーター役を務めた、Josef KYBURZ、Sakae GIROUX-MURAKAMI（ストラースプール大学）、そして、星野による、趣旨説明とともに本シンポジウムは開始された。

翻訳と言えば、第一義的には言語で表現されたテキストの翻訳を意味する。しかし、翻訳には、美的なもの、詩的なものの翻訳からはじまって、日本における明治維新以降の近代化に認められる、文化や思想の翻訳、そして、法律・政治・経済などの社会制度の翻訳にいたるまで、様々ある。

そこでの研究発表をいくつかの類型に纏めるならば、第一の類型は、「翻訳不可能なもの」に着目することによって、そこから、翻訳とは何か、よい翻訳とはどのような翻訳であるか、という問題に迫るものである。

この第一類型に属する研究発表としては、①道元が『正法眼蔵』において宋時代の禅の教えを翻訳（翻案）するに際して、言語による翻訳の限界に突き当たるなかで、沈黙するのではなく、徹底してことばを尽くし、反省と教義をめぐる論争を促すことによってこそ、それを成し遂げた経緯を論じるもの（Ch・Steineck）、②女工哀史の時代の「糸ひき歌」をフランス語に翻訳するに当たって、その律動・調子、ユーモア・洒落などをどう翻訳して、その歌のイメージをどう喚起するかを論じるもの（S・Schaal）、③「つづれ錦」とも称される「能」のテキストをそれが喚起する感覚的効果までも含めて翻訳するとはどういうことであり、英語での翻訳が成立するためには排除されざるをえないものは何かを論じるもの（山中玲子）、④『源氏物語』の英訳と現代語訳との比較検討を通じて優れた翻訳とはどのようなものであるかを提示し、優れた翻訳が翻訳対象言語（英語）の限界を超えてその可能性を拡大するものであるかぎり、それは優れた学問的業績に匹敵するものではないかと問題を投げ掛けるもの（S・Nelson）、などがある。これらの研究発表は、翻訳というものが、翻訳不可能なもの間に架橋しようという絶望的とも見える努力のなかで、異文化理解とあらたな文化創造を成し遂げるものであることを示唆するものであった。

第二の類型は、翻訳において何が起きているのかを問うものである。翻訳とは「解釈（Interpretation）」であると言ってよいが、そのさい、「解釈」は、ある文脈における何ものかを別の文脈のうちに「適用（Adaptation）」すること、もしくは、別の文脈のうちに「受容（Reception）」することを意味する。「解釈」という翻訳のいわゆる変換機能を通じて文化転移や文化受容が行なわれるが、この変換

機能の根底にある「フレーム・ワーク」のずれこそが、翻訳不可能性の原因を創りだし、誤訳と誤解を生みだす元凶であると同時に、明治維新以降の日本における西洋文明・文化受容による特異な近代化を特徴づけ、日本文化の自立性を示すものなのである。これを私たちはどう受け止め、どう評価するべきであろうか。

この第二類型の研究発表に属するものとして、①明治初期に夥しい数の哲学・科学用語（翻訳語）を創造した西周による西洋（とりわけコント）哲学・思想の受容とその意図について論じるもの（安孫子信）、②Religionという西洋語を「宗教」と翻訳するにあたって認められる、明治時代の西洋文明・文化受容の問題点を論じるもの（H・Rotermund）、③「同文同種」とも言われる、中国語から日本語への翻訳、日本語から中国語への翻訳にまつわる諸問題について論じるもの（王敏）、④明治初期にパリ警視庁を模範として設置された東京警視庁を取り上げ、近代化に向けての制度の翻訳・受容に認められる問題点を論じるもの（相良匡俊）、⑤明治初期における「ジャーナリズム」概念の受容・導入にまつわる諸問題を論じるもの（Ch・Seguy）、⑥翻訳不可能性の根底にあるものを比較社会学の立場から探り当てようとするもの（S・Shimada）、⑦翻訳による文化受容において示される独自の解釈のうちに働くベクトルを日本文化の偏向と自立性という観点から探り当てようとするもの（星野勉）、⑧翻訳不可能性や日本文化・社会の特殊性を主張すること自体のイデオロギー性を文化人類学の立場から論じるもの（H-D・Oelschleger）、などがある。

さらに、それ以外の研究発表として、①翻訳不可能性の根底に時間空間感覚の差異があることを認めながらも、天皇を中心とする明治以降の国家体制が「創られた伝統」に基づくものであることを論じるもの（J・Kybruz）、②なぜ天皇制が西洋的価値観から見て理解しがたいものであるかを論じるもの（小口雅史）、③日本において翻訳が先進文化受容という「一方通行」の手段であったとすれば、文化発信という観点から日本文学などの翻訳の意味や戦略の問題などについて論じるもの（I・Hijiya Kirschenerreit）、④連歌・連句の翻訳の分析から近世文学における主語の不在と近世文化における連に注目し、そこから日本文化の可能性を論じるもの（田中優子）、などがある。

このようにして、「翻訳の不可能性について」の議論は、それを一律に論ずることの難しさが指摘され、テキストの翻訳に限ってみても、文化間の距離（文化的関係の濃淡）によって、翻訳の意味も異なってくるのではないか、したがって、翻訳の問題は、一般論としてよりも、具体的なケースに即して考察されるべきではないか、という問題を提起する一方、なぜ、何を、誰のために翻訳するのかという、翻訳一般の問題を提起し、翻訳による文化受容は何も日本文化に固有のことではないとすれば、その意味を問う、というかたちで、問いが問いを生む、というように発展・展開していった。本シンポジウムは、こうした議論のなかで、異文化理解や異文化交流のあり方やその意義を問い、日本文化のもつ制約と可能性をとともも浮き彫りにするものであったが、同時にまた、国際日本学の可能性を強く確信させるものでもあった。

記事執筆：星野 勉（法政大学国際日本学研究所所長）

## Programme

### Jeudi 22 novembre 2007

09h00 Ouverture HOSHINO Tsutomu, Josef KYBURZ et Sakae MURAKAMI-GIROUX

#### Session du matin

Président de séance: Josef KREINER

09h30 Josef KYBURZ (CNRS, UMR 8155) 《Untranslatable?》

10h15 Christian STEINECK (Goethe-Universität Frankfurt)

《Dôgen the translator: Probing the limits of verbal expression》

11h00 ABIKO Shin (RCIJS, Hôsei University)

《NISHI Amane and the problem of translation》

#### Session de l'après-midi

Président de séance: Steven G. NELSON

13h30 Hartmut ROTERMUND (EPHE, UMR 8155) 《'Religion'=shûkyô? Problèmes de traduction et d'interprétation à l'époque Meiji》

14h15 Josef KREINER (Friedrich-Wilhelm Universität Bonn-RCIJS, Hôsei University)

《Aruga's dôzoku versus Gamô's harôji-The intricacies in using native terms in Japanese sociology》

15h00 Pause

15h15 WANG Min (RCIJS, Hôsei University) 《翻訳の可能性を試みる》

16h00 SAGARA Masatoshi (RCIJS, Hôsei University) 《La 'Préfecture' de Police de Paris et la 'Préfecture'》

16h45 Pause

17h00 Discussion

### Vendredi 23 novembre 2007

#### Session du matin

Président de séance: Irmela HIJIIYA-KIRSCHNERREIT

09h00 Steven G. NELSON (RCIJS, Hôsei University) 《Genji monogatari in English and modern Japanese translation: Translation and/as scholarship》

09h45 YAMANAKA Reiko (RCIJS, Hôsei University)

《(Im) possible? (In) evitable?: Nô translation as a 'tapestry of quotations'》

10h30 Pause

10h45 Sandra SCHAAL (Université Marc Bloch Strasbourg) 《Au-delà des mots...? Traduire l'intraduisible dans le cas des chansons de fileuses de soie》

11h30 Dominique PALME (Traductrice professionnelle) 《Réalité, malentendu, fatalité: d'où viennent les pièges de l'intraduisible? Et comment les surmonter? Le cas de la poésie japonaise moderne》

#### Session de l'après-midi

Président de séance: YAMANAKA Reiko

13h30 TANAKA Yûko (RCIJS, Hôsei University) 《Ren (forum) and subject in early modern Japanese literature and culture》

14h15 Christiane SEGUY (Université Marc Bloch Strasbourg) 《Le journalisme est-il un concept exportable? Réflexions sur l'importation d'un produit 'potentiellement subversif' au début de l'ère Meiji》

15h00 Pause

15h15 SHIMADA Shingo (Heinrich-Heine-Universität Düsseldorf) 《How to talk about welfare matters-translation problems by social survey》

16h00 Hans-Dieter ÔLSCHLEGER (Friedrich-Wilhelm Universität Bonn) 《The insistence on the unique character of Japanese society and the social sciences: when 'untranslatable' becomes 'identity'》

16h45 Pause

17h00 Discussion

### Samedi 24 novembre 2007

#### Session du matin

Président de séance: TANAKA Yûko

09h00 HOSHINO Tsutomu (RCIJS, Hôsei University) 《Translation and the cultural independence》

09h45 Irmela HIJIIYA-KIRSCHNERREIT (Freie Universität, Berlin)

《A 'Translation Culture' in a globalized world: discussing aspects of translation in present-day Japan》

10h30 Pause

10h45 Discussion finale



## 北京での活動報告

### (国際シンポジウム、中国の日本学研究機関との交流)



- 日 時：2007年10月20日(土)～23日(火)
- 場 所：北京外国語大学東院北京日本学研究センター 他

#### 北京での活動報告(国際シンポジウム、中国の日本学研究機関との交流)

法政大学の学術フロンティア推進事業サブ・プロジェクト②「異文化としての日本」のメンバー(星野勉国際日本学研究所長、王敏教授、勝又浩教授、田中優子教授、筆者)は、2007年10月20日、21日に北京外国語大学東院北京日本学研究センターを会場にして開催された国際シンポジウム(主催：北京日本学研究センター)に参加した。続いて22日に中国社会科学院日本研究所と中国現代国際関係研究院、23日に北京日本学研究センターを訪問し、日本研究者の声を聴き、「日本文化への問いかけ」と題するワークショップを開催した。また、日本研究機関と法政大学の連携の在り方について意見交換を行った。訪問先の多大なる支援により、実り多い相互学習の機会となった。以下、北京での活動の概要を報告する。

○国際シンポジウム「21世紀における北東アジアの日本研究」：開会式では、日中両国の来賓から、日本研究の重要性和シンポジウムの成功を祈念する旨のメッセージが述べられた。シンポジウムの冒頭に、龍谷大学教授の濱下武志氏、オランダ・ライデン大学教授のウリエム・ヤン・ボート氏、天津社会科学院北東アジア研究所長の易明氏の基調報告が行われた。午後、「文化の往還—『中心』と『周縁』」というテーマで、5名のパネラーによる全体パネルディスカッションが行われた。2日目は、日本語、日本語教育、日本文学、日本文化、日本社会、日本経済の6つの分野に分かれて、パネルディスカッションと分科会が行われた。発表者が多く、各自の発表時間が限られている中で、内容の濃い報告と質疑が行われた。日本文学分野の近現代文学1の分科会で、王敏教授は「宮沢賢治の中の中国—宮沢賢治と『西遊記』」というテーマで発表し、日本文化分野の分科会1で、星野勉所長は「翻訳と日本文化の自立性」というテーマで基調報告を行った。日中両国の研究者を中心に、多彩な内容で、数多くの報告が行われた。報告のテーマとレジュメを見て、日本研究が、領域の広がり、深さの両面で大きく前進していることがわかった。

○中国社会科学院日本研究所訪問 中国社会科学院では、日本研究所の孫新副所長、日本研究者の方々ワークショップを行った。崔世広氏から、「日本研究の方法論について、欧米の研究者に学ぶべき点が多い。しかし、その多くは西欧モデルを抽出したものであり、限界もある。欧米の研究で日本(文化)固有の特徴として指摘されたものには、アジアでは一般的に該当するものが相当見られる。今後は、中国を始めアジアの諸国の視点を取り入れた方法を構築していくことが重要である」旨の発言があった。続いて、日本研究所の方々に、平素日本や日本文化について疑問に思っていることなどを出していただき、それを素材に意見交

換を行った。参加された研究者は、日本の思想史、政治史、文化論、マスコミ、ジャーナリズム等を研究対象としておられる方々で、「日本人の考え方に影響を与えているものは何か」「伊勢神宮の式年遷都が20年を周期に行われる理由は何か」「伝統文化が現在の日本文化にどのような影響を与えているか」「比較文化研究と文化交流の可能性」「マスコミ、大手メディア、インターネットが日本社会に与えている影響は何か」等の項目をあげていた。それらの項目は、日本語文化圏に住む者にとっても、自画像の再確認にあたって大変興味深いものであった。

○中国現代国際関係研究院 中国現代国際関係研究院は、中国国務院直属のシンクタンクで、政府の政策立案に資するため、世界各国のデータを収集し、分析する機関である。研究院を訪問し、日本研究所の王珊副所長を始めとする方々と懇談し、中国の政策立案においてシンクタンクが果たしている役割について学ぶことができた。

○北京日本学研究センター 北京日本学研究センターでは、徐一平所長を始めとする日本研究者の方々、法政大学・国際日本学研究所と北京日本学研究センターの今後の協力関係の在り方や学術フロンティア推進事業として計画している事業の内容やその展開を巡って意見交換をした。学術フロンティア推進事業では、東アジア文化研究をテーマにした研究会、ワークショップや国際シンポジウムの開催、資料集・論文集の刊行(外国語の翻訳版も含む)、日本文化や日本研究に関するデータベースの構築等の事業が計画されている。国内外の日本研究者が、様々な言語による日本学の研究成果を参照できることを目標にして、海外の日本研究者の氏名、プロフィール、研究業績に関するデータを収集・整理し、ウェブで検索ができるようにすることや日本研究者を対象に、研究者の属する文化と日本文化のずれを究明するための調査を実施したい旨説明し、助言と協力を要請した。北京日本学研究センターでも、これまで中国における日本研究の状況について調査したことがあり、紙媒体で情報提供を行ってきたとのことであった。データベースの構築に伴う解決すべき課題がどこにあるか等について、中国の現状を踏まえた助言をいただくことができた。

記事執筆：杉長 敬治(法政大学特任教授)



国際交流基金「国際交流奨励賞・日本研究賞」受賞記念  
法政大学国際日本学研究所公開講演会

## アジアのムスリム・ネットワークと日本

報告者：アイシェ・セルチュク・エセンベル

(トルコ・ボスポラス大学日本学主任教授、日本研究学会会長)  
2007年国際交流基金「国際交流奨励賞・日本研究賞」受賞

- 日 時：2007年10月9日（火） 16：00～17：50
- 場 所：九段校舎3階 遠隔講義室2
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学特任教授）

去る2007年10月9日（火）、16時から17時50分まで、九段校舎3階遠隔講義室2において、国際交流基金「国際交流奨励賞・日本研究賞」受賞記念・法政大学国際日本学公開講演会として、アイシェ・セルチュク・エセンベル氏による講演「アジアのムスリム・ネットワークと日本」が開催された。

今回の講演では、「ネットワーク」「地域」「プロト・ナショナリズム」「トランスナショナル・ナショナリズム」といった概念を手がかりとして、アジアにおけるムスリム共同体が歴史的に果たした役割と性格が明らかにされるとともに、明治末期から太平洋戦争に至るまでの日本とアジアのムスリム共同体のかかわりについても考察がなされた。

講演の概要は以下の通りである。

### ■アジアにおけるムスリム共同体が歴史的に果たした役割と性格

- ・アジアでは11世紀ごろからイスラム教が普及し始め、メッカへの巡礼の道が「南のシルクロード」として発達するとともに、中世以来、中央アジアのウイグル民族の一部が巡礼の道を通してトルコ南部のタルソスに移り住むなど、巡礼の道を中心とする人的、物的な交流は活発であった。
- ・タルソスに移住したウイグル人は、後に新疆におけるウイグル人の民族独立運動にも加わるなど、巡礼の道を媒介とする国家を超えるネットワークを民族の自立に活用した。
- ・歴史的展開の中で、インド人はインド人の共同体、あるいはウイグル人はウイグル人の共同体、という個別的な枠組みの中に止まっていた。しかし、アジアのムスリム・ネットワークはこのような民族的、あるいは国家的な枠組みを超える超国家的な連帯として活躍した。
- ・20世紀になると、ウイグルの独立運動を支援するためにタルソスのウイグル人共同体から義勇軍が送り出されるが、トルコ政府は対して一切援助を行なわなかった。そのため、義勇軍はムスリム・ネットワークを活用して運動を実現した。また、汎イスラム主義の主要な論客であったアブデュルレシト・イブラヒムの活動に対してもトルコ政府からの支援はなかったが、エジプトの反英運動家、インドのムスリム・ネットワークなどが物心両面で援助を行った。このような事例は、国家という地域的制約を超えた民族主義という意味でtransnational-nationalism（超国家的民族主義）ということができる。

### ■日本とアジアにおけるムスリム共同体のかかわり

- ・明治末期から太平洋戦争終結に至るまで、日本政府が公式的にムスリム共同体との関係をもつことはなかった。

しかし、アジア主義者が「アジアの解放」という理念の下、イスラム教徒の民族運動家の亡命を受け入れるなど積極的な支援を行うとともに、防共という観点から中央アジア地域の安定を重視した陸軍なども対ムスリム政策に関心をもっていた。

- ・具体的には、日本における最初のイスラム教徒であった黒龍会の山岡光太郎が1910年に日本人として初めてメッカへの巡礼を行ったほか、大川周明とも親交のあったイスラム教徒田中逸平もメッカ巡礼を行い、アジアのムスリム・ネットワークと接触し、交流を深めた。また、対露脅威論を主導した陸軍は、対中央アジアないし対回教政策に冷淡であった政府と異なり、アジアのムスリム・ネットワークの活用に興味をもっており、1937年にはアジアと世界のムスリム・ネットワークについての具体的な分析も行った。
- ・太平洋戦争中には、東京回教印刷所から「日本がイスラムを守る」という趣旨の宣伝雑誌が出版されていた。この印刷所は松岡洋右の対露政策の一環で白系ロシア人とともに日本に亡命したタタール系亡命者が営んでいるものであった。
- ・歴史的には、黒龍会のアジア主義が日本の対アジア拡張主義を促進するという側面をもっていた。しかし、当時の黒龍会は、イスラム世界を「問題をもつ近代世界」と捉えており、日本との共同で「問題」を解消する可能性を模索していた。これは、19世紀以降のイスラム研究が「イスラムは近代以前の、古代的、中世的社会」というオリエンタリズム的観点でなされたのとは対照的であった。

記事執筆：鈴木 裕輔  
(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)



アイシェ・セルチュク・エセンベル氏



## 「翻訳不可能なことと翻訳不要なこと

### ——哲学・経済学の翻訳事例から——」

報告者：ジル・カンパニョロ (Gilles CAMPAGNOLO)

(フランス国立科学センター (CNRS) 常任研究員)

- 日 時：2007年9月28日 (水) 17:30～
- 場 所：58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信 (法政大学文学部教授)

フランス国立科学センター (CNRS) の常任研究員であるジル・カンパニョロ氏は、その研究テーマが経済学の認識論、および経済的合理性の解釈学の研究ということから分かるように、経済学を中心とする社会科学分野の研究者でありながら、哲学にも造詣が深いだけでなく、また、日本の社会・経済・文化の現状にも強い関心をもつ、現代フランスの異色の若手研究者である。主著は、*Critique de l'économie politique classique. Marx, Menger et l'Ecole historique*, Paris, Presses Universitaire de France, 2004 であるが、ヘーゲルについての研究業績もあれば、現代日本についての編著 (*Le Japon aujourd'hui. La puissance d'innover*, Paris, Presses Universitaire de France, 2004) もある。国際日本文化研究センター (京都) 外国人研究員として来日中という機会をとらえ、上記のテーマで研究報告をお願いした。

研究報告全体の問題は次のように立てられる。言語が文化の空間に閉じ込められていて、一定の世界観を前提に存在していると考えれば、翻訳不可能なことが生じてくるのは避けがたい。しかし、科学には、文化の多様性の手前に、合理的で普遍的な、人類に共通の基盤があるように見える。したがって、科学は翻訳が不要であると思われる。しかし、一方で、この科学といえども、数学的・分析的言語を使用しても解消しない、翻訳不可能な部分を抱えているようにも見える。この問題を、とりわけ哲学・経済学文献の翻訳事例に即して、次の三つの論題のもとに考察する、というものである。

#### 1) 科学 (とりわけ、社会科学)、哲学、そして数学で用いられている言語について

翻訳での知らず知らずの勘違いというようなことは、ヨーロッパとアジアとの言語間だけではなく、ヨーロッパの言語間でも頻繁に起こっている。数学化があらゆる領域で進展すればこのような勘違いはなくなるであろうが、すべてを数学化することは可能であろうか。これに対するカンパニョロ氏の答えは、ノンである。数学は、その富と精度にもかかわらず、科学 (社会科学) で用いられる概念の内容のすべてを汲み尽くすことができない。

#### 2) 東西の科学的交流 (科学の受容) について

東洋を含む非西洋では、西洋での進んだ科学・技術の知識を取り入れることが、科学的・技術的・経済的發展へと至る道である、と信じられている。明治維新以降の日本の近代化は、そのような道の典型である。しかし、この近代化といえども、科学・哲学思想の西洋から東洋への単純な翻訳 (= 転移・受容) とばかりは言えない側面がある。

カンパニョロ氏は、19世紀に日本の西周らが「哲学」や「経済学」をその学名さえ考案しつつ導入した経緯に説き及びつつ、翻訳 (= 転移・受容) の歴史的・文化的コンテクストに注目する必要性を強く主張する。

#### 3) 「文明の壁」という考え方について

カンパニョロ氏によれば、一方で翻訳や受容が行われながら、他方で言語や概念の間にまったく干渉を受けることなく「文明の壁」が立ちはだかっているというような考え方は維持できない。実際、科学の専門分野では、文明の壁を越えた一様化 (画一化) の過程が目下進行中である。しかしながら、文明 (もしくは文化) 間にはまったくの等価性は成立しえない。そのかぎりでは、一方で、経済学の領域で計量経済学がますます支配的となる傾向を強めるなかで、例えば、19世紀ドイツに由来する「文化経済学」には、大いに将来性があるとも言うことができる。

以上のように、フランス語、英語、日本語という三ヶ国語を交えての研究報告は、カンパニョロ氏の研究領域の広がりとの才気煥発さを伺わせる、きわめて刺激的で示唆に富んだものであった。議論も、翻訳可能性・不可能性をめぐって、三ヶ国語によって活発に行われたが、「国際日本学」のこれからのあり方を予想させる、国際的かつ学際的で、意義深いワークショップであった。

記事執筆：星野 勉  
(法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授)

ジル・カンパニョロ氏



## 第14回 日中文化研究会

### 「芥川龍之介の「支那遊記」—章炳麟とのギャップを中心に—」

報告者：魏 大海

(中国社会科学院外国文学研究所教授)

- 日 時：2007年8月8日（水）18：40～20：30
- 場 所：ボアソナード・タワー25階 インノベーション・マネジメント研究センターセミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

中国社会科学院外国文学研究所教授で、中国日本文学研究会秘書長・副会長の魏大海氏をお招きして、第13回日中文化研究会が開催された。魏氏は、以下の9つの論点に整理して、芥川龍之介の「支那遊記」について報告された。以下、報告の概要である。

①芥川文学及び「支那遊記」の中国語訳 芥川作品は、1921年に魯迅訳で「鼻」「羅生門」が出版されて以来、中国では多くの作品が翻訳されている。2005年には、魏氏と高慧勤氏の監修による中国初の「芥川龍之介全集」（全5巻）が山東文芸出版社から刊行された。この全集では、陳生保氏が「支那遊記」を翻訳している。

②中国での「支那遊記」論 「支那遊記」に見られる中国蔑視の表現には、中国では根強い批判がある。近年は、当時の中国の社会的背景を考慮して評価すべきであるとの意見や芥川の古代中国の文化と芸術の憧れ（文人趣味）と中国の現実とのギャップが芥川を失望させたことを踏まえて「支那遊記」を論評すべきであるとの見解も出ている。

③日本の代表的な「支那遊記」論 日本人の代表的な「支那遊記」論として、芥川のジャーナリストとしての能力を評価する佐藤泰正氏の見解、近年の代表的な見解と目される関口安義氏の見解、更に、白井啓介氏の見解の紹介があった。白井氏の論考は、1921年に上海で、芥川が何を見て、何を見なかったかを明らかにすることを意図したもので、芥川が訪問した1921年の上海と芥川の訪問以降の上海では、都市としての発展ぶりに大きな違いがあることを明らかにしている。

④巴金の反論について 著名な中国文学者である巴金氏の芥川への反論について紹介があった。巴金氏の芥川への反論は、「鋭い筆鋒、高い教養を持っているが、他に何があるのか。形式のほかに内容があるのか。その全作品は、“虚空”ということばで批判することもできるのではないか」いう厳しいもので、この反論に対する関口安義氏のコメントの紹介があった。

⑤中国人読者の、今日でもやりきれない表現 「支那遊記」にある表現（「鶏が油で焼いてあるのやそれから豚を丸の儘で皮を削いで吊り下げてあるのを至るところで見たことあります。支那では古くから各人が自由に動物を虐殺する習慣になって居るのは、宜しくないと思ひます。これは、一般支那人が知らず知らずの間に残忍性を帯びて来ることであります」他）には、中国人読者はやりきれないものを感じるとのコメントがあった。

⑥中国文化名士章炳麟との非平等的な会話 芥川と章炳麟氏との上海での会話（「支那遊記」では問答形式で書かれている）について、当時の日中間の関係を背景にした非平等的なものが感じられるとのコメントがあった。

⑦日本の政治的・文化的歴史背景 芥川が中国を訪問した当時の日本社会の背景について説明があった。第一次世界大戦を境にして、日本では、資本主義の変貌により経済的余裕が生まれ、帝国主義の無意識的な容認という方向が出てきたという内容であった。

⑧中国の危機雑多な社会・歴史情況 「支那遊記」が書かれた20世紀前後の中国の社会・歴史状況について説明があった。日清戦争の敗北による混乱、第一次世界大戦後の中国経済の発展、当時の中国と日本の関係に関わる内容であった。

⑨中国文化名人—章炳麟の立場 章炳麟氏思想について紹介があった。欧米の侵略から中国を守るには、満漢一致して抵抗するよりもまず排満が必要であるという思想である。

○結び 魏氏は、「支那遊記」に見られる中国蔑視は、当時の日本人一般にあったもので、日清戦争以来の文化的・歴史的雰囲気や当時の社会・歴史状況に起因するものと考えられること、芥川と章炳麟の違い、芥川のジャーナリスト的特性の評価の問題や「支那遊記」にある暗い表現の内在的原因についてコメントと問題提起をされ、報告を終えられた。

○報告を聴いて 魏氏の報告をきっかけに「支那遊記」を初めて読み、また、中国人研究者である秦剛氏や張蕾氏の「支那遊記」を巡る論考を読むことができた。魏氏に大いに感謝したい。「支那遊記」は、論じるに値するものを多数内包している。中国旅行により芥川の作風が変わったとも言われ、旅行後、芥川は「桃太郎」「将軍」等を執筆した。日本の植民政策への辛辣な批判を含むと言われる「桃太郎」には、章炳麟からの影響があるとの指摘もある。中国旅行が芥川にどのような変化をもたらしたかについて、今後、更に研究が深まることを期待したい。今日、芥川は世界各国で翻訳され、国際作家の感があるようである。世界各国で芥川がどのように読まれ、評価されるかは、日本で生きる者にとっても大いに関心のある事柄である。余談であるが、司馬遼太郎と陳舜臣の対話集を読んでいたら、近代中国の知日派蔣百里が日本人の残忍さとして刺身を食うことを例にあげているという記述に遭遇した。文化間のギャップは至る所にある。

記事執筆：杉長 敬治（法政大学特任教授）



魏 大海氏



## 第15回 日中文化研究会

### 「漢文明と日本 ―日中の違い―」



報告者：光田 明正

(桜美林大学孔子学院学院長)

- 日 時：2007年9月19日（水）18：40～20：30
- 場 所：80年館7F 会議室（丸）
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

文部省で留学生政策の立案等に從事され、退官後、長崎外国語大学の学長等の要職を歴任され、現在、桜美林大学孔子学院学院長をされている光田明正氏をお招きして、第15回日中文化研究会が開催された。氏は、冒頭に孔子学院（中国文化や中国語の学習のために、中国政府が各国の大学等と提携して設立した学校で、世界に約150校、日本にも8校が設置されている）の概要について説明され、引き続き「漢文明と日本」というテーマで、日中間の相違点について報告された。以下、報告の概要である。

①自然とのかかわり<広さ・大きさの違い> 中国は広大な面積の国土に、言語や文化を異にする多くの民族が居住している。56民族がある。総人口約13億。そのうち約94パーセントが、漢族（日本では「漢民族」といわれる）である。漢語を使用していることから「漢人」とも言える。しかし、漢語は、おおまかに北方語、呉語、福建語、広東語、客家語に分類できる。福建省の南部の言葉、閩南語と北方語の距離は英語とドイツ語の距離より大きいとされる。また漢族以外の少数民族は、それぞれの言語を有している。

<治水の歴史←→花見の伝統> 約五千年前に、大河の治水を始めとする自然を治める技術をもった政権が中原に出現した。その後、秦の始皇帝、漢の高祖、武帝の活躍により、一つの大きな政治圏が次第にできあがっていった。中国では自然は大変シビアであり、自然を統治することで巨大な権力をもつ政権ができあがった。政権担当者は強力である。日本では自然はゆるやかで美しい。花見を楽しむ。人々の気性は激しくはない。政権担当者も同様である。自然の違いは、日中間の人々の気性に大きな相違点を生んでいる。

②タイムスパンの違い<5千年の歴史、史記の伝統「十年一昔」の感覚> 日本の歴史は、神話の時代を含め、2,600年余りだが、中国には5千年の歴史がある。日中のタイムスパンの違いは大きい。中国では日常的に、千年前のことが話題になる。歴史を重視する姿勢が際立っている。漢族は5グループの異なった母語を持つ人類集団であるが、タイムスパンに対する感覚の共通性と歴史を重視する姿勢を共有する。日本では、十年一昔という言葉に象徴されるように、歴史をそれほど重視しない。

③中華の多様性と統一性 日本は、多元的文明摂取と単一性を特徴としているが、中国では、広大な国土に、言語や文化を異にする集団が存在している。歴史的には同じ文化と言語を共有する者同士間でのみ通婚圏が成立していた。つい最近まで北の人と南の人が結婚することは珍しかった。主食は北方は小麦、南方は米。ただ「茶」と言うと北京では、緑茶、花茶が出、福建の廈門ではウーロン茶が出る。

食文化や生活習慣は、地域によって大きな相違があり、一言に中国人が云々ということではできない。

④人間関係の違い<家族重視の中国 集団重視の日本> 中国では、親族関係内の呼び方が細かく定められている。祖父、祖母、甥や姪、従兄弟の呼び方が、父方と母方では異なる。家族内部の秩序がきちんと定められている。中国では、家族で食卓を囲むことを大切にしている。日本では、本来機能集団である職場が共同体のようになり、職場の人間関係が重視されているが、中国では、そのようなことはない。

⑤日本は儒教文化圏<論語は広く読まれてきた 解釈の違い 実践の違い> 中国では、漢の武帝の時代に儒教が国学となり、四書五経が広く学ばれるようになった。四書五経の中でも、論語が説く忠孝、とりわけ「考」が重視されてきた。日本でも論語や孟子が広く読まれてきたので、儒教は日中間で共有する文化と言ってよい。しかし、日中間では解釈と実践が大きく異なっている。

⑥人々と国家の関係の違い 日本語の「くに」国は、国家、民族、政府、故郷の全てを意味する。日本では、「国」と「故郷」が同じような感性でとらえられる。「国」への忠誠は自然の感情とも言え、長らく国への忠誠が重視されてきた。中国では、国への忠誠よりも、家族や自分を大事にしてきた。伝統的に王朝政府は税金をとるところで、近寄らないのが得策という考えが強かった。

このような様々な日中の違いを相互理解することこそ、真の友好の第一歩である。

○報告を聴いて 中国への関心が、現在及び近い将来の政治や経済に重点が置かれ、諸子百家等伝統的な中国に関するものも多くなか、中国の歴史と社会を形作る基本的な内容について、多くの実例をあげながら解説して下さった光田氏に心から感謝したい。氏が示して下さった内容は、中国を理解する上で、また、日本を理解する上で、幾何学の問題を解く時の補助線のような役割を果たしてくれると思う。

執筆記事：杉長 敬治（法政大学特任教授）





## 第1回 東アジア文化研究会

# 「国際江戸学と江戸アジア学の模索」

報告者：田中 優子

(法政大学社会学部教授・国際日本学インスティテュート教授)

- 日 時：2007年10月26日（金）18：30～20：20
- 場 所：ポアソナード・タワー25階 B会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

### 国際江戸学と国際日本学

「国際江戸学」は国際日本学の一部を成す。では国際日本学に求められているものは何であろう。まず「日本」の民族的・文化的多様性を、事実にもとづき十分に認識していることが必要だ。英語および複数の言語で情報と知識を獲得すること、英語と自国語を使用して説明できることも大切であろう。とりわけ重要なのは、専門とする分野について、国内のみならず他文化圏の成果を参照することと、他文化圏の研究者に理解可能な方法で説明できることである。また専門とする分野について、他分野の研究方法を参照でき、他分野の研究者に理解可能な方法で説明できることも大切だと思われる。

「国際日本学」の目標は二つある。その第一は、翻訳事業、日本研究、日本についての言説、表現などが、世界でどのようになされているかを知ることである。これを実行することにより、国内での研究の意味が相対化され、個々の研究が、狭い領域を超えた日本研究全体の中で位置づけられることとなる。第二には、翻訳および日本研究や日本についての言説や表現を、できるだけ広く国際的に発信することである。これを実行することにより、個々の研究成果を外から眺め、他文化圏との比較あるいは関係の中で言語化し、論理化することが可能となる。これら国際日本学に求められることは、国際江戸学にも求められることである。

### 国際江戸学の方法

江戸学の「世界からの視点」構築には、二つのことが必要である。第一に、さまざまな言語による江戸学の成果を積極的に評価し、取り入れ、他文化圏の研究者たちと情報交換をすることである。第二に、江戸時代の歴史や文化を、当時の世界状況のなかで解釈しなおすことである。「世界状況のなかでの解釈」は具体的には次のようなことで可能となる。

- 1、15世紀～19世紀日本の、東アジア（中国、朝鮮、琉球、ベトナム、台湾）との相互関係を把握する。
- 2、15世紀～19世紀日本の、南アジア（インド、スリランカ、バングラデシュなど）、東南アジア諸国との相互関係を把握する。
- 3、15世紀～19世紀の（日本を含む）アジア地域と、大航海時代以後のヨーロッパとの相互関係を把握する。
- 4、江戸時代の成立と崩壊の意味および江戸文化の内容を、世界の動きのインパクトとの関連で解釈し直す。

以上のことは、今までの仕事のなかでは、次のような考察や論文で展開してきた。

### 国際江戸学を準備した仕事

#### 事例1・江戸時代成立事情についての考察

江戸時代成立の原因は、世界経済の動き、とくにアジアと連動した変化のなかに求めることができる。それは大航

海時代のヨーロッパの動きを背景としながら、アジア諸国からのハイテク商品の大量輸入、その後の国内生産の動き、それに続く日本経済のアジアからの自立の順番で起こった。国内生産力の増大は内需の活性化をもたらし、それが江戸文化の要因となった。

- 1、1510年のポルトガルによるゴア占領に始まる、世界経済とアジア・ハイテク国家（中国・インド）と鉱物資源の連動。
- 2、1492年のコロンブスのアメリカ大陸上陸に始まり、1560年代から本格化した南米銀山開発とアジア経済への参入。
- 3、1543年の倭寇による日本への鉄砲売り込みに始まる、ハイテク戦争への突入とその敗北。
- 4、日本の銀生産の減少と1600年のリーフデ号事件
- 5、アジアにおけるヨーロッパ勢力の棲み分け固定化を背景にした、1633年～36年の幕藩体制の完成。
- 6、各地における都市の確立、商品生産能力の向上、市場経済の成立。

事例2・アジアにおける物語の共有と展開

事例3・布の技術と生活文化の共有・相互影響

事例4・世界状況から江戸時代を見る

事例5・外国人研究者の江戸文化へのまなざし

事例6・翻訳の選定

事例7・翻訳批評、現代語訳批評

記事執筆：田中 優子

(法政大学社会学部教授・国際日本学インスティテュート教授)



田中 優子氏



## 第2回 東アジア文化研究会

# 日本華僑社会における伝統文化の再構築と地元との関係

報告者：曾 士才

(法政大学国際文化学部教授)

- 日 時：2007年11月14日（水）18：30～20：30
- 場 所：58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

11月14日（水）、18時30分から20時40分まで、58年館2階国際日本学研究所セミナー室において、第2回東アジア文化研究会が開催された。今回は、法政大学国際文化学部教授の曾士才氏を迎え、「日本華僑社会における伝統文化の再構築と地元との関係」と題して行われた。

1859年の安政の開国以来150年近い歴史をもちつつ、担い手が言語、生活習慣など客観的屬性において限りなく日本への同化が進む日本華僑社会を対象とする今回の報告では、曾教授の長崎における現地調査に基づき、「伝統文化の再構築」という観点から日本華僑の動態が紹介された。報告の概要は以下のとおりである。

### ■長崎ランタンフェスティバル

- ・新地中華街商店街進行組合が1987年から開始した「燈籠祭」が、1994年に長崎市との共同実施として開催されるようになったのが「長崎ランタンフェスティバル」である。
- ・長崎ランタンフェスティバルの開催当初は、華僑と地元商店街の間には当惑や衝突が生じた。
- a) 華僑側には「中国の伝統文化を表現することと役所の人と一緒にすることが両立するか」という不安が存在したが、協議を重ねることで「長崎を思う気持ちは同じだということに気づいた。
- b) 地元商店街には、「バレンタイン商戦の時期になぜ中国色の強い祭を行うのか」「なぜ中国の祭に商店街から協賛金を出さねばならないのか」という反発があった。
- ・このような対立点は相互理解の促進によって解消されるとともに、現在では「最終決定権は中華街の人にある」という暗黙の了解の下、ランタンフェスティバルは長崎の冬の名物として開催されている。
- ・ランタンフェスティバルの起源となった燈籠祭以来、祭では獅子舞が行われているが、長崎にはもともと獅子舞の伝統はなかった。長崎の獅子舞は横浜の華僑から導入されたものだが、これは「文化の流用」のひとつの例と考えることができるだろう。

### ■長崎くんち

- ・国の重要無形民俗文化財である「長崎くんち」において、2000年にくんちの重要な役目である長采（ながざい）を華僑が務めた。
- ・長采を務める華僑は、当初「自分は祭が行われる諏訪神社の氏子という意識はあったが、中国人である自分が長采になってよいのか悩んだ」ということである。都市の成熟度が「地域住民を対象とした行事にエスニシティゆえに差別を受けるか否か」によって測られうるとすれば、華僑を長

采として迎えた長崎の成熟度は高いといえる。

### ■時中語学院

- ・華僑の子どもを対象とした時中小学校は、1905年に誕生し1988年に閉鎖された。その校舎に開設されたのが、主として日本人を対象に中国語を教授する時中語学院である。
- ・現在、時中語学院には幅広い受講者が在籍しており、講師を務める中国人留学生との交流を深めている。

### ■稲佐国際墓地と唐人屋敷

- ・江戸時代から明末清初の混乱を避けた商人たちが長崎に定住、唐人屋敷が稲佐墓地を永代借地するとともに、管理していた。唐人屋敷は1867年（明治元）に唐人屋敷が解散したが、八閩公所のちの福建会館が管理を継承した。
- ・戦前は外国人が土地を購入できないということもあり、「稲佐墓地は中国人のもの」という意識はあったものの、福建会館が土地の所有登記をすることはなかった。
- ・戦後、華僑の菩提寺であった悟真寺が墓地の一部を登記したが、華僑は今でも墓地に対して「自分たちのもの」という意識をもっており、所有権はないものの墓所内の清掃などを自主的に行っている。ここから、華僑にとって、墓地と唐人屋敷は有形文化財となっていることが伺える。

記事執筆：鈴木 裕輔  
(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)

曾 士才氏



## 第3回 東アジア文化研究会

### 高校生が第2外国語を学ぶ意味（韓国語を中心として）

#### — 高校生の視野の拡大と文化理解 —



報告者：武井 一  
(東京都立日比谷高等学校)

- 日 時：2007年12月12日（水）18：30～20：30
- 場 所：58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：高柳 俊男（法政大学国際文化学部教授）

12月12日（水）、18時30分から20時30分過ぎまで、58年館2階国際日本学研究所セミナー室において、第3回東アジア文化研究会が開催された。今回は、東京都立日比谷高等学校などで韓国語を教える武井一氏をお招きし、「高校生が第2外国語を学ぶ意味（韓国語を中心として）— 高校生の視野の拡大と文化理解 —」という演題のもとで行われた。

当日の参加者は、法政大学の教員・学生のほか、高校生や一般の参加者あわせて約16人であった。外部からの参加者には、他大学や高校で韓国語を実際に教えている方が目立った。講演は、報告レジュメのほか、自ら作成した『高校時代になぜ第2外国語を学ぶのか—日比谷高校のハングル授業を中心として』と題する小冊子（全18頁）に基づいて進められた。

報告の概要は以下のとおりである。なお、本学では科目名を「朝鮮語」と呼んでいるが、ここでは報告者の用語にならない「韓国語」で統一する。

#### ■高校教育における韓国語

- ・2005年度において、英語以外の外国語を教えている高等学校は、中国語553校、韓国語286校、フランス語248校、ドイツ語105校となっている。ドイツ語・フランス語が私立に多いのに反して、中国語・韓国語は70%以上が公立の高校である。
- ・韓国語の設置理由は時代により変遷してきたが、近年は異文化理解型や学校改編設置型が増えている。大多数の学校が「英語＋韓国語」の、事実上の第2外国語として教えている。学校指導要領上は「学校設定科目」の扱いになる。
- ・第2外国語の学習は、英語で失った語学への自信を、他の外国語学習で取り戻させるという目的もある。ただし、英語が総じてよくできる日比谷高校のような場合、これには該当せず、別の授業目標を設定する必要がある。

#### ■日比谷高校の韓国語の授業

- ・韓国語は1997年から開始した。2年生対象の自由選択科目の1つで、金曜日の8・9校時にドイツ語・フランス語・中国語などとともに関講されている。選択者はこの4言語で毎年50人以上、韓国語だけだと最小7人から最大40人。
- ・言葉の学習を主としながら、韓国の文化、歴史と現状、日韓関係、在日韓国人、日本語との比較など、地歴や公民科の話題も加味して、視野の拡大をはかっている。
- ・いわば「教養としての第2外国語」であり、英語と同レベルの学力が求められるセンター試験において、これを選択する生徒はいない。

#### ■受講した卒業生へのアンケートから

- ・高校における韓国語学習がどういう意味をもったかを知るために、卒業生にアンケート調査を実施した。そこで出された意見をごく簡単に紹介すると――

- ・受講動機では、この10年、韓国・北朝鮮をめぐる関係の変化が影響を与えているのを知ることができる。芸能人が韓国語を学んだり、サッカーワールドカップの日韓共催などが学習意欲を促進している半面、北朝鮮への関心から受講する人はほとんどみられない。
- ・視野を広げたり、関心の幅の拡大に役立った、という意見が多数ある。たとえば、他者と積極的にコミュニケーションを取ろうという姿勢が身についた、英語の発音にあらためて関心が向いた、韓国との比較で足元の日本を見つめ直すようになった、等々。また、大学に行ってから、韓国語の学習を継続する場合や、新しい語学にチャレンジする場合でも、すんなりと入っていったという。

#### ■まとめ

- ・総じて、必修ではなく、受験にも関係ない韓国語を、生徒たちは楽しみながら学んでいる。そのなかで、外国語＝英語という図式を破ることで、言語の相対化が起きるし、文化相対主義的な見方を養うようになる。それは自らの言語や文化を、これまでとは違った目で見つめ直すことにも通じている。
- ・高校での第2外国語学習は、語学を通して生徒の関心を広げさせる「触媒」の役割を果たす。このような第2外国語が、より多くの学校で置かれることが望ましい。

#### <感想>

- ・以上のような武井一氏の話聞いて、いわゆる受験校であるにもかかわらず、韓国語を熱心に教える教師と、楽しみながら学ぶ高校生がいることに、ちょっとした感動を覚えた。なにしろ私が大学生だった1970年代後半、NHKに韓国語の語学番組はまだなく、大学ですら授業のあるところはまだ少なかったのだから。
- ・同時に、大学における第2外国語学習の意義や、その求められる到達度についても、再考させられた。大学の場合、コマ数が増え、語学としてより高度なレベルに達することが求められる。しかし、外国語大学のような専門家養成の機関は別として、多くの受講者にとっては、ここで言う「教養としての第2外国語」的な側面が強いのも事実だろう。その意味で、今回の話は、大学で語学を教える立場にある者にとっても、多くの示唆に富むものであった。

記事執筆：高柳 俊男（法政大学国際文化学部教授）



## 第4回 東アジア文化研究会

### 「台湾における日本文学の受容と研究の現状」



報告者：李 文茹  
(台湾慈済大学)

- 日 時：2008年1月25日（金）18：30～20：30
- 場 所：58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：勝又 浩（法政大学大学部教授）

報告は3つの柱によって構成されている。すなわち、

- 1) 台湾における日本語・日本文学について、その歴史と翻訳の現状を見ながら。
- 2) 台湾の大学における日本語、日本文学関連授業の現状、および日本学関連学会の歴史と現在。
- 3) 新たな日・台連携の中での日本学の可能性。

であるが、1では、日台関係を考える大前提である、台湾近代の対日本、日本語政策の歴史を概観した。それを大きく分ければ1-1日本の皇民化政策期（1937～45）、1-2「光復」初期＝脱植民地・脱日本化時代（1945～49）、1-3戒厳令下（1949～87）、1-4戒厳令解除後（1987～）である。

植民地時代は公的な場では日本語しか許されず、母語を奪われたが、1945年の解放後はその反動としての中華化政策の時代となり、今度は日本語が禁じられた。しかし植民地時代が永かったために日本語で表現することになれた作家や知識層が多く、表現の自由という点からみれば、この脱植民地化期はもう一つの不幸な時代でもあった。このあたりの事情は韓国とも通ずるところが多い。1-3は蒋介石時代だが、国内外とも緊張の時代である。台日の文化的国交回復は1960年代の日本映画の輸入あたりから徐々に始まり、詩、大衆小説の翻訳が行われ、川端康成、三島由紀夫の小さなブームもあったが、決定的には1987年のマスコミ開放からである。翻訳も急増し、70年代の3倍を超えるようになったが、日本の流行がほぼ同時代的に入りになり、若者たちの間に「哈日族」（ジャンキー？）と呼ばれるような現象も生まれた。

そこで李氏は現在の村上春樹流行の現状を出版社のホームページを引きながら紹介したが、面白かったのは一つのアンケートで、村上作品によって「日本への理解が深まったか」という問には「はい」が35%、「いいえ」が62%という回答であった。春樹作品を読む若者たちは面白がりながらも案外醒めているのかもしれない。

次には台湾の大学における日本学関連の教育現状について。代表的な台湾大学、輔仁大学、東海大学の教育目標、カリキュラム、日本文学関連授業の例を引きながらの分析や比較検討が報告された。各大学は当然それぞれの特色を打ち出しているものの、全体としては実践的な日本語教育に傾き、実社会ですぐ役に立つ人材養成をうたっていることが明瞭であった。現在日本学関係の大学院を持つ大学が13校あるそうだが、そこでも、その半分以上の割合で応用日本語（経済、貿易、情報関連）関係カリキュラムが支配的で、文学も文化もまだ十分ではない。そうしたなかで李氏自身は文学を通して日本文化そのものへの理解を深めることが重要であると考え、教材の選択にも配慮工夫しているとして、具体的に作品を上げながら説明された。

続いては台湾における日本語日本文学関連学会の現状で、2種の学会の研究発表、シンポジウムのプログラム例を示しながら実情を紹介された。最も歴史があり、大きな学会は1989年に「台湾日本語文研究会」として発足した現在の「台湾日本語文学会」であること。次が2003年に「(日本)古典懇話会」として発足した「台湾日本文学会」(2005)などである。他にも各大学が拠点となった小規模の学会もかなり存在し、2007年にはそれらを糾合したシンポジウム「国際学術研討会」が、しかも2種も催された。他分野のことはわからないが、これらを見るかぎり、台湾での日本文学研究はかなり盛況なのだと思われた。

その他に特徴的だったのは「読書会」の存在だが、これは日語・日文学科の教員が中心となって文学作品ばかりでなく研究書や理論書を読む会で、小規模ながら実のある会だということであった。

最後にまとめとして、台湾現代の「日本学」研究面は、日本語学、日本語教育関連が中心で、文学そのものや日本文化全般についての研究はまだ層が厚いとは言えないこと、また国内外の他分野他領域との連携が少ないことが、反省点、また今後への課題としてあげられた。

以上は、2時間にわたる、よく調べられた、詳細で、また総括的な報告の、要約の要約にすぎないが、会場ではたくさんさんの刺激を受けた。質疑の時間が十分取れなくて残念だったが、参加者もみな同じ思いであったろう。

植民地時代のあと反日時代が来るのは当然のことだが、台湾ではそこに大陸中国との関係が入ってきて、反日一色では説明しきれない複雑さがある。日本文学の受容も当然そうした歴史を背負わざるを得ないのが、台湾での格別な性格である。一方、台湾の若者たちに人気のある留学、あるいは遊学希望地の第一はやはりアメリカだそうだから、だとすれば大学での英米語、英米文学文化の教育はどうなっているのかという側面もある。そこにも実践語学偏重傾向があるのかどうか、そうした比較のなかで日台の関係を考えるべき要素もあるだろう。言い換えると、語学か文化かという問題は、日台関係だけでなく、異文化交流において常につきまとう基本の問題だと思うからである。機会があれば、これらの問題をさらに掘り下げたいと思われた。

記事執筆：勝又 浩（法政大学文学部教授）



○「中国における『惜別』の受容から中日文化を見る」

報告者：楊 偉 (法政大学国際日本学研究所外国人客員研究員・四川外語学院日本学研究所教授)

○「共同体の視点から日中の政治を見る」

報告者：霍 建崗 (法政大学国際日本学研究所外国人客員研究員・中国現代国際研究院日本研究所助理研究員)

● 日 時：2007年9月7日(金) 15:00~18:00

● 場 所：58年館2階 国際日本学研究所セミナー室

法政大学では、2006年10月からの1年間、四川外語学院日本学研究所教授の楊偉氏と中国現代国際研究院日本研究所助理研究員の霍建崗氏を客員研究員としてお招きした。帰国前の9月上旬、研究成果を報告する会が開催された。以下、両氏の報告の概要である。

○楊偉氏「中国における『惜別』の受容から中日文化を見る」

日本の文学の翻訳をされ、アニメ研究にも造詣が深い楊氏は、太宰治の小説「惜別」について報告された。

中国では、太宰の作品は1980年代から翻訳と研究論文の執筆が始まり、「惜別」は2006年に翻訳され、ここ数年間で10篇以上の研究論文が発表されている。「惜別」は、「大東亜会議」の五大宣言を小説化するため昭和18年に内閣情報局と文学報国会の依頼を受けて、太宰が執筆し、昭和20年9月に刊行された国策小説で、魯迅の親友であった老医師が仙台医専に留学していた頃の魯迅について回想的に語るという設定で創作されている。

「惜別」は、封建的な秩序や儒教と戦う闘士、聖人として神聖化されている魯迅を主人公にしていることから、「大作家による大作家を描く卓抜な作品」「世界文学においても、魯迅を主人公とする唯一の長編小説」として位置づけられ、太宰の特性(個人性、頹廢無頼、自虐的)と魯迅の性格(社会性、国民性、闘争的、攻撃的)が、永遠なる青春文学と民族魂としての思想文学とのギャップとして注目を集めている。

中国では、審美的な観点よりも、中国人としての国民意識や民族意識をもって文学を鑑賞する傾向が強く、魯迅が医学から文学へ転じたことは、「国民意識の目覚め」の物語として受容されている。また、太宰の戦争観・中国観と中国の民族魂としての魯迅像が「惜別」でどのように表現されているかについて関心がもたれ、太宰が戦争への抵抗を間接的に示し、中国の保全を主張し、魯迅を好意的に描いたことが評価されている。

楊氏は、「惜別」について、「大東亜の親和という名目的な主題にひきずられて、「惜別」と言う作品が失敗作という烙印を押されるようになったのではなく、そうして「私」を超えた“外部”とのかかわりという主題を「私」的な感懐や感情の論理に従属させてしまったことが「惜別」における失敗の大本であったと言わざるを得ない」と指摘しながら、太宰が「大東亜共栄」のイデオロギーに疑いを示し、それを脱構築し、イデオロギーよりも感性を重視して、感性の力を最大限に発揮したことを評価された。



楊 偉氏

○霍建崗氏「共同体の視点から日中の政治を見る」

霍氏は、共同体が「土地が富の基盤としての段階で、土地に対する占取を軸に形成される人間関係の総称」であり、「統治者の共同体と被支配者の共同体に分かれている」ということを基本に日本と中国の政治について報告をされた。

市民社会の成立は共同体の解体を意味するが、共同体の解体・崩壊が直ちに市民社会の成立には至らず、その成立は、国内事情と国際事情に左右される。中国では、隋時代、科挙制度が成立し、被支配者層から官僚が出るようになったことから、統治者の共同体は解体の一途を辿る。霍氏は、日本の事情には精通していないと断りながら「日本は封建状態が続き、統治者と被支配者の間に溝があり、庶民が出世することは技術の方面に限られ、政治の面で指導者になることは至難の業であった」と指摘された。

次に、両国の宗教と共同体の特徴について言及された。中国は元来無神話の国で、知識層が作った倫理規範(礼)が宗教と同じ役割を果たし広く浸透し、被支配者共同体の呪術的な習慣は全滅せず、道教に移行した。日本の記紀神話は支配者共同体の神話であった。仏教が伝来し、土着の神話や呪術の伝習と習合し、支配者と被支配者の共同体共通のものとなっていった。両国の共同体の特徴として、中国は血縁的で、日本は、地縁と血縁の要素が併存している。

最後に共同体と政治文化の問題に言及された。文革以降の中国は、共同体は消滅したものの、市民社会が成立する気配はない。日本は共同体の全滅から逃れてはいるが、市民社会は十分には成立していない。先の参議院選挙では、格差問題が争点になったが、日本人が格差に敏感なのは、共同体意識が残っていることによる。中国では、王安石の時代(宋代)から、改革は難しいと言われている。改革が既得利益層の利益を奪い戻すため、官僚の利益に反するからである。2007年に日本でKY(空気を読む)という言葉が流行語になったが、これは日本特異のものである。市民社会が未熟な点を、世間が代替的な役割を果たしてきたが、その世間も変化しつつある。両国とも、市民社会を成立させることが課題であるが、先はまだ見えていない状態にある。

○最後に 意欲的な客員研究員をお迎えし、学術交流ができたことは、法政大学にとって大きな資産となった。お二人の今後のご活躍を祈るとともに、未永く交流が続くことを期待する。

記事執筆：杉長 敬治(法政大学特任教授)



霍 建崗氏

## 第1回合同研究会

- 日 時：2007年9月3日（月）10：00～17：30
- 場 所：58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：報告者についてはタイムスケジュール参照

学術フロンティア・プロジェクト『異文化研究としての「日本学」』におけるサブ・プロジェクト③「日本の中の異文化」は、北の東北・北海道と南の琉球諸島という二つの境界領域の文化に目を向けることにより、多元的な日本文化の構造を解明し、日本文化研究に新しい局面を切り拓くことを目的としている。その活動の一環として、9月3日法政大学市ヶ谷キャンパスにて、北海道と奄美・沖縄から計5人の研究者を招き、第1回合同研究会を開催した。

北の異文化分野からは北海道余市町余市水産博物館館長の乾芳宏氏と、北海道埋蔵文化財センター第1調査課長の越田賢一郎氏から話題提供していただいた。乾氏に報告をお願いしたのは、その地元の大川遺跡が、『日本書紀』にみえる7世紀半ばの大和政権による北方遠征として著名な「阿倍比羅夫北征」の到達点とする説があるほど日本海交易と密接に関わる重要な拠点であるからである。また越田氏に報告をお願いしたのは、氏が鐵鍋などを中心に古代から中世にかけての物資の流通に早くから注目し、貴重な多くの業績をあげてこられたからで、この両氏からの話題提供によって、北の世界における交易と交流の重要性をあらためて再認識し、やはり交易と交流を史的特質とする南の世界との切点を見いだせればと考えたからである。

乾氏には上記大川遺跡を主たる舞台に、8世紀以降に擦文集落が形成された時期から南北交流の遺物が顕著なることを指摘していただき、それ以後の集落の変遷を詳細に検討しながら、日本海沿岸交流について、銚帯金具、鈴（これらは大陸のアムール川上流の松花江付近の靺鞨文化とも深く関わるものである）、墨書・刻書・刻印土器、銚頭等、様々な事例をとりあげて説明していただいた。

越田氏には、物質文化を代表するものとして鍋を、精神文化を代表するものとして玉を素材にとりあげていただき、中世日本国の北の境界の外にあった（すなわち外国として認識されていた）「蝦夷ヶ島」の、北方世界の窓口としての役割を具体的に説明していただいた。鉄鍋の導入によって擦文土器は終焉を迎え、竈は居炉裏に変わり、それを入手するために、より交易に依存する社会に変わっていたことを明確にいただいた。また玉については、それが本州とは異なる装身具文化であって近世アイヌにまで引き継がれたこと、中世北日本のガラス玉が山丹交易のガラス玉とも関わるもので、やはり交易と深い関係にあったことなどを説明していただいた。最後に大陸—蝦夷島—本州という交易網を動いた物資について総括的にまとめていただいた。

以上2報告によって、古代から中世にかけての、交易と交流を中心とした北方世界のダイナミックな動きがあらためて確認できたと思う。

南の異文化分野からは沖縄県立芸術大学教養科目・教職課程教授の安里進氏、琉球大学教育学部准教授の中本謙氏、そして奄美市立奄美博物館主任学芸員の高梨修氏から話題提供していただいた。三者とも最近話題に上がっている南

西諸島の中世時代早期（沖縄ではグスク時代から琉球王国時代への変動期、奄美諸島では類須恵器段階期である10世紀頃から13世紀頃まで）を中心とする研究成果を発表、参加者の問題意識を大いに刺激した。

安里氏はまず自身が担当していた浦添ようどれの発掘調査結果を紹介、C14年代測定や高麗系瓦の年代記（咸淳9癸酉）等からこの王陵の造営年代を確立し、それが『中山世鑑』に述べられている英祖王権の年代と合致することから、今まで伝説的なものとしかみられていなかった英祖王朝が歴史的な事実であったと強調した。また、いわゆる「大型グスク」の役割、その正殿の構造等にも触れ、現在最古といわれているこの琉球王朝の設立には東アジア広範囲（日本内地、朝鮮半島、中国南部）における人の流れや、その裏にある歴史（元朝）が多大な影響を与えたことを説明された。

中本氏は琉球方言のp音の問題を取り上げ、従来、一貫して文献時代以前の残存とされている琉球方言の八行p音について疑問を投げかけた。氏の報告によると、琉球方言のp音の中には、琉球各方言にみられるb音（w>b）と同じく、むしろ逆の変化をたどってきたものもあるのではないかと（Φ>p）という。参加者に新たな視点を持たせる報告であった。

高梨氏は近年の奄美群諸島・喜界島のグスクでの発掘成果にまつわる様々な報告をされた。喜界島グスクは大宰府の出先機関であったのかという話題に始まり、琉球弧における土器の動態をくわしく論じられた。10世紀からすでにヤマト日本との密接な交易が行われていた奄美群島における在土器と外来土器の変遷を辿ることで、当時の交易の諸相を把握することができた。

三者の報告により、琉球弧は古代から中世への変動期にすでにヤマト日本だけではなく、広く東アジア諸地域と交流があったという周知を図ることができた。

この合同研究会を通し、古代末期から中世初期、ヤマト国家における北と南の辺境地域には酷似した変化が起こり、また想像をはるかに超える開かれた地域社会が生まれていたことが確認された。このようにして両地域の文化変動を比較討論することで、双方の研究が深みを増し、互いに新しい理解を得ることができた。

記事執筆：ヨーゼフ・クライナー（法政大学特任教授）  
小口雅史（法政大学文学部教授）

## タイムスケジュール

- 10:00 開会の挨拶 ヨーゼフ・クライナー（法政大学特任教授）  
10:30 「余市川流域における擦文集落について」  
報告：乾 芳宏 氏（よいち水産博物館館長）  
11:30 「鍋と玉—中世蝦夷地を巡る交易の様相—」  
報告：越田 賢一郎 氏（北海道埋蔵文化財センター第1調査課長）  
【司会進行 小口 雅史（法政大学文学部教授）】
- 12:30 昼食  
13:00 「境界を越える王権形成—英祖王権の登場と中国・朝鮮・日本—」  
報告：安里 進 氏（沖縄県立芸術大学教養科目・教職課程教授）  
14:00 「琉球方言におけるp音について」  
報告：中本 謙 氏（琉球大学教育学部准教授）  
15:00 「土器の動態にみる琉球弧と大和世界の交流史—弥生時代～鎌倉時代を中心として—」  
報告：高梨 修 氏（奄美市立奄美博物館主任学芸員）  
【司会進行 間宮 厚司（法政大学文学部教授）  
・吉成 直樹（法政大学沖縄文化研究所教授）】
- 16:00 全体討論【司会進行 ヨーゼフ・クライナー】  
17:30 終了



# 新刊案内

(本の購入に関する問い合わせ等は各出版社をお願いします)



法政大学出版局 刊  
TEL. 03-5214-5540

- 第1章 『菊と刀』にみる「日本文化」  
ルース・ベネディクトの視点……………星野 勉
- 第2章 150年前に日本に来たフランス人……………相良 匡俊
- 第3章 モーツァルトと日本  
「魔笛」における「日本の狩衣」……………ヨーゼフ・クライナー
- 第4章 日本の妖怪とアジアの妖怪……………横山 泰子
- 第5章 東アジア文化の交差点としての日本文化……………川村 湊
- 第6章 現代中国における一つの日本観……………王 敏
- 第7章 欧米人の能楽発見……………西野 春雄
- 第8章 二人のノーベル賞作家  
川端康成と大江健三郎……………勝又 浩



三和書籍 刊  
TEL. 03-5395-4630

- はじめに……………星野 勉
- 日本学とは何か……………ジョセフ・キブルツ
- I 日本研究、「内」と「外」からのまなざし  
知識の生産、内発的vs外発的……………ハルミ・ベフ (翻訳: 木島 泰三)
- 境界を越えて——文化人類学的日本研究の場合——……………桑山 敬己 (翻訳: 千田 啓之)
- 人類学者たちとその地域——ヨーロッパ/日本のアプローチに関する諸考察——……………ジョイ・ヘンドリー (翻訳: 木島 泰三)
- 「古き佳きヨーロッパ」像の呪縛……………シュテフィ・リヒター (翻訳: 鈴木 裕輔)
- 日本学・地域研究の知的生産とその脱オリエンタリズム化の困難——
- 文化比較と翻訳——文化社会学的考察——……………島田 信吾 (翻訳: 大橋 基)
- 友日からの日本研究へ……………崔 古城
- 中国文化の領分と日本文化の領分——ヨーロッパの観点から——……………ウィリー・ヴァンドウラ (翻訳: 松井 久)
- II 日本文化、「内」と「外」からのまなざし  
ヨーロッパと日本に於ける空間と時間の知覚——文化相対主義の弁護——……………ジョセフ・キブルツ (翻訳: 鈴木裕輔)
- 日本思想史のあり方を考える——丸山眞男論を通じて——……………アニック・ホリウチ
- ヨーロッパの博物館・美術館保管の日本コレクションと日本研究の展開……………ヨーゼフ・クライナー
- 眞の異文化理解は可能か——教室のイメージを例として——……………相良 匡俊
- 伸びゆく日本の文化力——フランスにおけるマンガの場合——……………ジャン=マリ・ブイス (翻訳: 山梨 敦子)
- III 日本文化をひらく  
国民国家をめぐる民族学と民俗学——柳田国男からの展開——……………樺山 紘一
- 言葉から見える江戸時代の多様な人々……………田中 優子
- 一揆・祭礼の集合心性と秩序——百姓一揆絵巻『ゆめのうきはし』を素材にして——……………澤登 寛聡
- 伝統と同時代性——能楽研究の国際化は可能か——……………山中 玲子
- 和辻哲郎の哲学のポテンシャル……………星野 勉
- 趣味の国民性をどう扱うか——九鬼周造の日本、バルクソンのフランス——……………安孫子 信
- おわりに「国際日本学」とは何か——「翻訳」から見えてくるものを手がかりに——……………星野 勉



三和書籍 刊  
TEL. 03-5395-4630

- 総論 比較を伴った文化交流——戦前の「日本教習」と日本留学を中心に——……………王 敏
- I 日中比較文化篇  
一九六〇年代の日中文化交流をめぐる一考察——『天平の甕』の翻訳事情を中心に——……………孫 軍悦
- 日中広告文化の違い——最近の広告摩擦を機に考える——……………福田 敏彦
- 日中齟齬の文化学的研究——時間と空間の認知傾向を中心にして——……………李 国棟
- 日中両国近代実業家の儒学観——渋沢栄一と張謇の例を中心に——……………于 臣
- 日本人の伝統倫理観と武士道……………谷中 信一
- 文化象徴による接近——四君子の蘭と十二支の亥——……………濱田 陽
- 日本文化をどう理解すべきか——異文化の視点によるアプローチ——……………楊 晔文
- II 日中比較コミュニケーション篇  
戦後六〇年の日本人の中国観……………巖 紹暹
- 日中の異文化コミュニケーションと  
相互理解における阻隔……………劉 金才・尚 彬 (翻訳: 坂部 晶子)
- 日中相互認識とナショナリズム……………王 新生
- 東アジアにおける対話の土台づくり……………羅 紅光
- 日中のコミュニケーション方略に関する一考察……………高橋 優子
- 謝罪の発話行為における「談話の収束方法」と「話者交替数」に着目して——
- 戦前日中政治衝突と文化摩擦の一幕——日中戦争開始当日の日中記者大論戦考察——……………徐 冰
- グローバル化社会における日本語教育の目標及びそのモデル的構築……………王 秀文
- おわりに 日中比較文化研究に関する幾つかの視点……………王 敏

法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究中心  
〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3  
法政大学市ヶ谷キャンパス九段校舎別館1階  
TEL. 03-3264-9682 FAX. 03-3264-9884  
E-mail nihon@hosei.ac.jp  
URL: <http://aterui.i.hosei.ac.jp/>

